審査の結果の要旨

氏名　Carla Ricci

引きこもりは日本特有の現象とみなされていたが、近年ではイタリアをはじめとして諸外国でもみられると報告されている。そこで本論文では、日本とイタリアの引きこもりについて比較文化的観点からその特徴を明らかにすることを目的とした。論文は、研究法にについて説明する序章、日本の引きこもりの特徴を論じる第１章、イタリアの引きこもりとその社会的背景を論じる第２章、両国の引きこもりを比較し、その文化的要因を論じる第３章、形成要因として模倣を検討する第４章、研究結果を総括する終章から構成される。

序章では、量的な調査が困難というだけでなく、それが社会文化的現象であるとの理由から、文化人類学的研究法、特にフィールドワークとナラティヴ分析に基づく事例研究法を採用することが説明された。第１章では、日本の引きこもり及び関連する家族研究のレビューを通して、母親の過保護が重要な要因になっていること、その背景には強固な母子（特に息子）関係と父親の不在という、家族特徴がみられることを示した。また、事例研究により、上記の家族関係が実際にどのような様相を呈しているのかを具体的に示した。

第２章では、イタリアの引きこもりについて、相談機関でのフィールドワークと事例研究を行い、その特徴と社会文化的背景を検討した。イタリアでは 2009 年に最初の引きこもり事例が報告された後、多くの親が子どもの引きこもりを心配し、相談を求めるようになった。相談担当の心理支援職への面接調査から、イタリアと日本の引きこもりの共通点として“6ヶ月以上の引きこもり、学校に対する恐怖経験、インターネット依存、昼夜逆転”、逆に日本にあってイタリアに無いこととして“恥感情、母親への暴力の存在”を指摘した。また、両国共通に有効な支援法として相談員が家庭に出向く支援が行われていることも明らかにした。第３章では、日本とイタリアの引きこもりの共通点について、社会的背景を中心に検討した。いずれにおいても過保護と母子相互依存がみられることを確認した。引きこもりの成立と維持には、物理的欲求を刺激する現代消費社会からの影響及びネットあるいはコンピュータ依存がみられることを示した。多くの事例で日本の漫画やアニメに依存ともいえる強い関心がみられ、それが維持要因になっていることも明らかにした。

第４章では、引きこもりの心理的要因として家族間の葛藤感情に無意識的に共感し、模倣して取り込むメカニズムがみられることを事例研究により検討した。終章では、引きこもりの問題は、現代の消費社会における家族のあり方とも強く関連しており、日本社会だけでなく、今後多くの先進国において生じうる現象であることを示唆して結論とした。

本論文は、丹念なフィールドワークに基づき、心理文化社会的観点から日本とイタリアの引きこもりについて比較研究を行い、日本特有と思われていた引きこもりが地域を超えて共通した特徴をもつ現象であるとともに、その成立において現代の消費社会や情報社会の問題を普遍的に示す特性を含むものであることを具体的に示したことに特に意義が認められる。よって本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに相応しいものと判断された。